

令和4年10月13日発行 巻数/第77巻第10号(毎月13日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物承認

# 春燈

2022 October

10月号



# 成瀬櫻桃子の句

## 道ならぬ定家の恋や片鶉

『素心』以後平成四年

定家の恋の相手は、式子内親王、加茂齋院で終生独身を通した。定家には妻があり、人目を忍ぶ恋仲だったが式子の死後、定家の執心が定家葛となり墓を覆ってしまふ。式子の霊は息苦しいと訴えるが、最後には自ら葛に埋れてしまふ。師の句には、道ならぬ恋の苦しさの中に何ものにも代え難い喜ひと、片鶉に淋しさとやさしさの思いがあつたと思つ。

三宅文子

成瀬櫻桃子の句

千手観音秋日の一と手病む子に欲し

『素心』昭和五六年

櫻桃子先生の長女美菜子さん（昭和三十一年生）は、三歳の折ダウン症候群と診断された。十歳の時、知的障害者更生施設「素心学院」に入所。千手観音は、現世のあらゆるものを同時に見て、同時に救う働きをもつ菩薩です。櫻桃子先生は、その一本の手でもよいから、美菜子さんに差し伸べて欲しいとの切なる願いを詠まれています。なお『素心』の句集名は素心学院から。

林 紀 夫

名誉主宰 安立公彦

主宰 鈴木直充

敦忌の家居昭和も遠ざかる

一つ葉の巖にふかき裂目かな

亡き兄の軍服写真夏座敷

敦忌の緑蔭につい長居せり

転た寝の背ひんやりと夏座敷

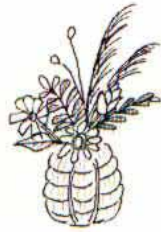
夏瘦の吾をはげます人も瘦せ

水無月の雨滴やしぼし手に親し

古書店の本の匂へる土用入

西日中ひとつ日に舞ふ日章旗

ほうたるにいにしへのことたつねけり



# 当月集

鈴木直充選



○ 立 竹 人

そこはかとなき萍のながれかな

泳ぎきし少年夕日そのままに

白蓮の風の高さに咲きにけり

突然の雨それぞれの蓮かな

蓮は実をとばしそこねし水の音

○ 辻 泰 子

朝焼やジャングルジムの四角形

通るたび樹下に午睡の男かな

日本地図を早送りして梅雨明くる

詫状を書いては消して夜の秋

唐黍を手折れば戦後香りけり

○ 小 林 文 良

蚊遣火や座敷童の来にけらし

修羅の世のゆふぐれに茄子焼きにけり

景色よき器大振り夏料理

愛しさはあぎとひ肥ゆる金魚かな

しかすがに砂子路深し青柳

○ 坂 本 依 誌 子

熱の子のあきらめきれぬ水あそび

朝焼や早発ちの荷を背負ひ直す

雲払ふ風の強弱秋近し

食べ頃はまだか桃の香手に移す

宇都宮線ことごとく鱗雲

○ 種 田 利 子

梅雨明の大雨襲ふ美濃尾張

手を通すことなく老いぬ白緋

登り詰め孤高誇れり鉄線花

我武者羅に生きて今日また炎天下

七夕や安楽往生願ふのみ

# 春燈の句

鈴木直充選

金魚玉二人の日々を映し絵に

嵐 井上 宮子

何処までが川何処までが梅雨出水

海霧流れトーテムポール立つ港  
夜の秋ギターの弦の切れしまま

金婚の喧嘩上手や半夏生

青葉闇深き睡りの忠魂碑  
夏蝶やステンドグラスと艶競ひ

兵庫 川端 正紀

吹いて乾す修正液や涼新た

東京 古谷 昌女

しやぼん玉消え妹は旅立てり

青蜥蜴太古の光走りけり  
炎屋や会所籠りの囲碁三昧

愛知 後藤 大

あねいもといもとの逝きぬ夏の雲

日ざかりを逃れ産土神の杜  
緑蔭や膝の句帳を風が繰る

愛知 後藤 大

雲の峰人の定めは孤独なる

緑蔭や膝の句帳を風が繰る

愛知 後藤 大

古い先といふ未知の日や夏の星

三重 水谷 甚

石仏を標の古道草茂る  
早暁の明かり転ばせ蓮青葉

愛知 後藤 大

青葉木菟神の古木に巢立ちたる

石仏を標の古道草茂る

愛知 後藤 大

暮残る岳の稜線青葉木菟

三重 水谷 甚

早暁の明かり転ばせ蓮青葉  
先生と共に楽しむ早桃かな (祝・早桃五〇旬会)

東京 山口 地翠

よろづ屋の乏しき灯り青葉木菟

雷の窓打つ雨の激しさよ

東京 山口 地翠

もう湧かぬ海女の置き水ちつち蟬

神奈川 河田 水尾

乗物に乗れば涼しき外出かな

水の辺に蔵の影なす立葵

神奈川 河田 水尾

何時までも夏の大雨ふるさとに

東京 山口 地翠

